

忘れてはならないこと

群馬県・群馬大学教育学部附属中学校 3年
大井 海琴（おおい みこと）

授業でハンセン病について学んだ日、両親と「偏見」や「差別」について口角を飛ばす議論を深夜まで繰り広げた。身体障害者の父と看護師の母を持つ私は、幼い頃から「命の大切さ」を訴える両親の姿を見て育って来た。そんな私は、真摯な気持ちからハンセン病患者と向き合いたいと思いこの夏、草津にある療養施設栗生楽泉園を訪れた。

草津までの道のり、私は罹患者の気持ちを絶えず考えていた。ハンセン病について調べると、「らい予防法」により罹患者は隔離され、人権を無視された扱いを受けたことが分かった。罹患者の言葉が書かれた本では、どんなに過酷な仕打ちを受けたか、他人をどれほど恨み、憎んでいるかが書かれていた。その為私は無意識の内に「罹患者は全員恨みを抱いている。」と勝手に思い込んでいた。しかし、こんな思い込み自体が偏見や差別を生む原因になるということの後を後に思い知らされることになるのである。

私を迎えてくれたのは入園者自治会長の藤田三四郎さん。藤田さんは大変お元気で、その容姿からはハンセン病を伺い知ることはできなかった。しかし、藤田さんは紛れもない罹患者なのだ。その証拠に、藤田さんの名は本名ではない。罹患者は施設に入所するにあたり偽名を使用させられたと言う。つまり、その時点で罹患者は世間から存在を消されてしまうのである。そんな藤田さんから語られた話は、ハンセン病だと宣告され、三度も命を絶とうとしたこと。重症患者の看護を押しつけられ、数え切れない人を看取り自らの手で葬ったこと。家族が受けた迫害や侮辱的な言葉など、想像を絶するもので筆舌し難いものだった。しかし、こんな迫害と差別は同時にハンセン病患者達の人権回復闘争の歴史でもあったのだ。闘争の末、「らい予防法」が廃止されると今まで差別や人権侵害を繰り返していた多くの人が掌を返す様に態度を変えたと言う。私は聞いていて怒りを覚えたが、不思議なことに耳を塞ぎたくなる様な内容を語る藤田さんからは、全く怒りや恨みを感じられないのだ。私は話を聞くまで、自分の運命を呪い・周囲への恨みつらみの言葉が出てくるとばかり思っていた。しかし、出てきた言葉は「入園出来て良かった。差別は受けたが、今では恨み

を抱く罹患者も少なくなった。そればかりか最近はたくさんの方が我々を理解し協力してくれるので嬉しい。何故なら一人の百歩は力が無いが、百人の一步は力になるから」と言う感謝の言葉だったのだ。本当に「恨みは無いのか」と何度聞いても答えは同じだった。私は恥ずかしくなった。ハンセン病について調べ、罹患者の心を理解したようなつもりでいながら、実は何も理解できてなくて、そればかりか罹患者を偏見の眼で見ているのは私自身だったのだ。私は、話を聞いてとめどなく溢れ出る涙を拭いながら、心の片隅に潜んでいた「偏見と言う名の種」が身体から洗い流されていくのを感じていた。それは同時に、「思い込みや無知が偏見や差別を生み出す」ことを強く感じた瞬間でもあった。それだけに藤田さんの「自分と同様に他人を愛すればいつか必ず世界から差別はなくなる、他人を愛して下さい」の慈愛に満ちた言葉が一層重く腑に落ちるのだった。

帰りがけ、千五百ページにも及ぶ「入所者証言集」を手渡された。その際、私は見えない襷も手渡された気がした。その襷とは証言集に記された罹患者の「事実を風化させないで、私達の事を忘れないで」という搾り出すような叫び声と、その姿だったのである。

ハンセン病が治る病気であるのに誤った知識から悲惨な人権侵害が長期に渡り続いた。同じ間違いを繰り返さないためにも、事実を語りついで行く必要がある。ここ楽泉園でも高齢化が進み証言者の数が減っている。これは全国一五全てのハンセン病療養所に共通することだ。ハンセン病問題は罹患者がいなくなればそれで終わると言う問題ではない。今後人権問題を考える際、重要な指針になりうる事実なのだ。そしてこの事実の風化を防ぐことが、私達若い世代の役目だと私は思う。

私は小六の時、友人達から突然イジメを受けた。それを引きずり、他人を恐れ・憎み、自分を嫌って生きて来た。しかし、罹患者の声が私に生きる力と前を向いて歩む勇気を与えてくれた。楽泉園訪問は私に人生観が変わる程の衝撃を与えてくれたのだ。こんな私だが、罹患者の声を伝える「百人の中の一人」にはなれるはずだ。そのために私は今、この作文を書いている。文字は時を越えて生き続けるから。私はこれからも楽泉園訪問を続けるつもりだ。実際に中学生の私が出来ることには限りがあるが、差別や偏見を少しでも減らすために一步を踏み出すつもりでいる。「自分と同様に他人を愛すればいつか差別はなくなる。」と言う藤田さんの言葉を胸に。